

[学会]

第638回 千葉医学会例会 第1内科教室同門会例会

日 時：昭和56年1月24日（土）

会 場：京成ホテル

1. 救命しえたパラコート中毒の1症例

森 照男, 石川 洋, 田口忠男
木内夏生, 加藤繁夫, 石原運雄
(千葉労災)
上田 志朗 (千大)

症例は、45歳男性、自殺目的で除草剤パラコートを服用した。我々は、強制利尿、早期のステロイド大量療法、及び腹膜灌流などにより患者を救命した。しかし同様の治療による死亡例も報告されている。自殺目的や誤飲による急性パラコート中毒が増加している一方、確立された治療法はなく、死亡率は93%と非常に高い。一日も早い解毒剤の開発や治療法の確立が望まれる。

2. 糖尿病性骨症の臨床

永田勝太郎, 石津 汪, 久富昭孝
江崎 正博 (北九州市立小倉)

踵骨に病的剝離骨折をきたした糖尿病性骨症2例を経験した。

糖尿病群35名、非糖尿病群19名について以下の結論をえた。1) 糖尿病群の43%に骨粗鬆症が認められた。2) 骨粗鬆症が有る群、無い群の間で性差、コントロール状態、血清 Ca・P・Al・P の有意差は無く、3) 年齢差・血清 Alb. 値で有意差を認めた。(P<0.01, 骨粗鬆症群はより高齢で低 Alb. 血症を示す。) 4) 糖尿病群と非糖尿病群で骨の陰影濃度 (Lumbar Spine Score)・変形度 (Step Wedge 法) に有意差は無かった。以上より糖尿病の骨粗鬆症は一般の骨粗鬆症と同様に、無機質代謝障害ではなく、蛋白代謝障害の関与した骨基質の形成異常によるものと考えられる。

3. リウマチ熱の治療中、DIC をおこし救命し得た1例

近藤福雄, 本村八重子, 永瀬敏行
角田富雄 (船橋中央)
小林 章男 (千大検査部)

症例、33歳男性、発熱と小発疹を主訴として入院。リ

ウマチ熱の診断のもとに、SB-PC30g とプレドニゾロンにて治療中、重症薬剤性肝障害と出血傾向が、ほぼ同時に出現した。赤沈亢進、血小板数も正常範囲であったが、出血凝固時間、フィブリノーゲン、FDP 等出血凝固系検査値の著明な悪化により、DIC と診断。直ちにヘパリン、輸血等の治療を行なった。その早期治療により、AT-IVの低下もなく、救命する事ができた。

4. Disseminated intravasculation (DIC) 発症時にみられる尿円柱、特に血小板円柱について

重田英夫, 倉田矩正
(千葉県がんセンター臨床検査部)
松村 康一 (君津中央)

1979年12月~1980年11月の1年間に千葉県がんセンターで検査された尿11195検体の沈渣中に出現した円柱と DIC 病態の関連を追求し、特に円柱に参与する血小板の意義を強調した。すなわち1. 臨床的 DIC 症状発現以前に尿円柱がみられる。2. DIC 持続中は円柱特に血小板円柱あるいは血小板塊が出現し、DIC 解除により消失する。代償性乃至潜在性 DICでも同様の所見が得られ、尿所見からみた DIC の診断的可能性は、尿一般ルーチン検査法で69.5%、染色集円柱法で77.3%であり、その中、血小板の関与したものが80%を占めた。

5. パーキンソン病の脳萎縮についての研究、続報 (CT 所見と脳波所見との対比において)

○栃木捷一郎, 北沢栄次, 新田義朗
町井 彰 (都立豊島)

Gath らは最近 PEG を用い、一方 Schneider らは CT 所見からパーキンソン病における脳萎縮の傾向を定量化して示しているが、いずれも神経学的に異常を示さない群との間で比較を行っていない。また Cobb ら以来脳波の徐波化傾向もこの疾患で報告されてきた。今回パーキンソン病19例、正常例83例の間で CT 所見上の Bicaudate in dex, 脳波の中心周波数を比較・検定したが Student't 検定法で行う限り両群間で有意差を認めなかった。